

産業建設民生常任委員会で陸上養殖を視察

10月4日から6日に、産業建設民生常任委員会は、様々な魚種の陸上養殖の先進的な取組を調査するため、視察研修を行いました。

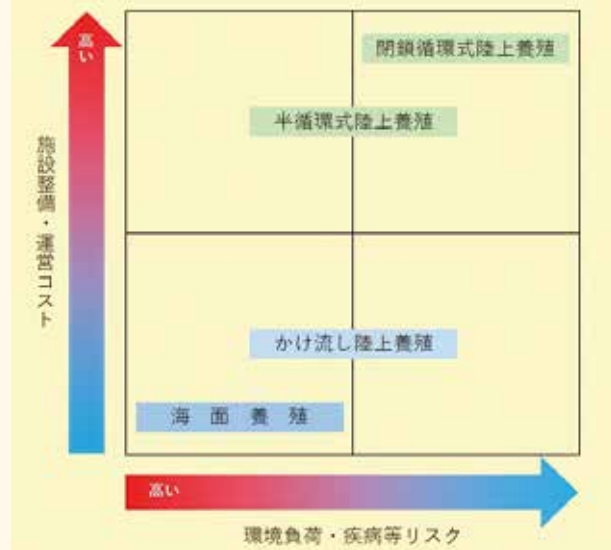
トラフグ、バナメイエビ、トラウトサーモンの陸上養殖に取り組む企業を訪問し、世界的な魚需要の推移や陸上養殖の手法、当町での陸上養殖の実現可能性などを調査しました。当町ではトラウトサーモンの海面養殖に取り組んでいますが、環境への影響や効率的な運営手法など課題があります。

三陸沿岸の海況・水温が大きく変化する中、海面養殖の更なる効率化や当町の風土に合った魚種の可能性について探ってきました。

～陸上養殖とは～

陸上養殖とは、陸に人工的に作った環境で魚介類の養殖を行う方法で、大きく「かけ流し式」、「半循環式」、「閉鎖循環式」の3つに分類されます。

かけ流し式や半循環式では、海や川、地下水などを使って行う一方、閉鎖循環式では一度入れた水をろ過・循環させて行うため、環境への負荷が少なく、疾病混入リスクも低いため、安心安全な養殖が可能です。しかし、魚のフンやエサの残さなどをろ過する技術はハードルが多く、コストがかかります。このため、自然条件や立地に応じて3つの手法のどれが山田町に適しているかが焦点です。



職員から説明を受ける議員



実際の水槽とトラフグを見ながら説明を受ける議員

(株) 奥村組 技術研究所 (茨城県つくば市)

山田町の復興にも尽力いただいた奥村組では、主力の土木建設事業の他に、新事業開発部を立ち上げ、閉鎖循環式の手法でトラフグの陸上養殖に挑戦しています。

はじめにこれまでの取組の説明と、実際に山田町で養殖を行えるかの検証もしていただきました。町がこれからどのような産業振興を目指すかを明確にし、魚種を選定すべきとの提言をいただきました。

その後、実際に泳ぐトラフグと閉鎖循環システムを視察しました。説明の中で、ろ過に用いる材料として、カキ殻が非常に有用である一方、とても重いので、カキ殻の洗浄や入れ替え作業が大変なことでした。海水を使うことのできる当町では、閉鎖循環式だけでなく、様々な手法が取り入れられそうです。